

俳句を作る上に於て、古典はどういふことになるのであらうか。

初めて俳句を作る人には、古典は先づいらなと思ふ。今日の俳句を勉強してその作法なり、味ひ方なりを勉強して、少し上達したら古典の勉強をしたらよいと思ふ。

初學者で、芭蕉とか蕪村とか一茶とかいふものを、座右に準備する人がある。俳句といふものの起源から始めて、根本的にやらうとする人がある。これはほんたうは本格的な勉強法であるかも知れない、然し私はあまり賛成しない。何故なら、さういふことをしてゐるうちに倦きてしまつて、ほうり出しはしないかと思ふのである。

俳句はどこから、どうして興つて、どんな古人が、どんな俳句を作つたなどといふことは知らなくても、俳句は五・七・五調十七字から成り、季題を讀みこむ詩だ、お手本はホトトギス（私の場合など）——とさういふことにして、どしどし作つた方がよいと思ふ。繪を習ふ場合でも、繪畫とは何ぞやなどと言はないで、直ぐ庭の花でも寫生することを習ふ方がはやみちだと同じことである。俳句學とか繪畫學はもう少しあとでもよいのである。それに悪く古典に深入りして、それが浸み込んで、どうかすると、その缺點などばかりを身につけるやうなことになる、いぎ今日の俳句を作らうとする時に、それが邪魔になることがある、その惡風を除き去るのに時間がかかることになる。

それならば古典を勉強しないでよいか——といふと、やはり勉強しなければいけないのである、ただ現代の俳句が一通りわかつてからの方がよからうといふだけのことである。

俳句はどこから起つて、どう發達して來たか、古人にはどんな俳人が居てどんな作品があるか、かういふことは一通り知つておく方がよい。出來ればもつと精しく、古人はどんな作品を作り、どんなことを好み、どんな技巧を用ゐ、どんな思想をもち、どんな生活を送つたか、どんな影響をその時代、又、今日に與へてゐるか、俳句の發達にどんな貢獻をしたか、そこまで勉強出來たら力強いと思う。

私達は終局に於ては、これら先人の作以上のものを作らなければならぬのであつて、さういう意味で、古人の仕事は見ておかなければならない、——實は初學者に對して私はこんなことを言つてゐるが、これは私自身に常に感じてゐることなのである。ところが中々その古典勉強が出來ない、芭蕉のことをもつと勉強し度い、蕪村もさうだ、一茶のものも、又、あの月並と言はれる蒼虬や梅室のものも一應見ておき度い。一體どこが月並的で、どこが悪い、月並にもよいところがあらうし、私達の學ぶべきところもあると思ふ。私達が高んだ、かんだと言ふけれど、古人も一生懸命作つたのだ、輕輕には片づけられない。古人の仕事に劣つてゐないか、その糟粕をなめてゐないか、反省の資料としなければならぬ。

以上は俳句を作るといふことからばかり述べたが、もし俳句鑑賞といふことから言つても、古句を理解し、古人の心に觸れ、而も現代の作品との對比といふことから、どうしてもこれは勉強しなければならぬ。